

アート&テクノロジー東北2024 講評

昨年度にコロナ禍以後の対面開催が復活し、今年度も対面でのデモンストレーションを行うことができました。しかしながら、コロナ禍で人々の行動様式が変化してきたこともあってか、本イベントへの集客は昨年度よりもさらに困難な状況になりました。それでも、同日に近くで開催されていた子ども向けのプログラミング教室にお声がけをすることで多くの子どもたちや保護者の方々にも展示した作品群をご覧いただけることになりました。

これまで「アート&テクノロジー東北」のイベントで続けてきた対面での作品展示は、ご来場いただいた方々との生のコミュニケーションでしかなしえない場のあり方があります。今回のように子どもたちが生き生きと楽しみながら体験している様子は、やはり、こうでなければいけないと思ひ起こさせるものがありました。

審査の結果、「最優秀賞」となったのは「含羞花 / Sensitive Blossoming Petals」(Scottie Chih-Chieh Huang, Deng-Feng Jiang, Jie-Ke Pan, Hsiu-Mei Chang, Chin-Hsun Liu) です。「含羞草」を日本語では「オジギソウ」と読みますので、「オジギバナ」という意味になるのでしょうか。紙製の白い花の部分に手を近づけると閉じていた花びらが開くような設定ですが、距離のセンサーと熱で伸び縮みする線によって実現されています。背後では Rhinoceros と Grasshopper によるパラメトリックなデザインがなされています。とても繊細な作りと動きが実現されており、魔法をかけているような感覚に陥りました。

次に優秀賞は「くすっとカルタ」(よしたけ なつき, 大町 秀太郎)、「 Δt -Sphere」(金山 正貴)、「手描きのタイポグラフィとグラフィックアート」(笹谷 成実) の三点となりました。「くすっとカルタ」は、児童を対象とした遊び的なシステムを提案しています。カルタの絵とアニメーションをセンサーで読み取らせることで連動させ、その次をどうするか、カルタを自由に選んで進めていくものです。実際に子どもたちが体験している様子がうかがえて心が温まりました。「 Δt -Sphere」は、当日はセンサーと連動するインタラクティブな設定のデモンストレーションが不調で残念ではありましたが、透明な板を動かすことで生じる自然な波がとても心地よく、照明も効果的に作用していました。「手描きのタイポグラフィとグラフィックアート」は、ペンタブレットを使って手描きすることからロゴタイプを制作する手法の成果を展示していました。通常は、すでにデザインされているフォントのアウトラインのデータをリメイク

することでロゴタイプは作られることが多いのですが、改めて人の手で制作することの重要性を感じさせる活動でした。

その他に、「審査員特別賞」として「モーション認識を用いたインタラクティブアート」（大庭 寛樹，大田 遥斗，菅原 皓生，西舘 蓮）と「造形目標から考える創作折り紙と展開図のデザイン」（山下 公平，松浦 勇士郎）、「奨励賞」（学部生までを対象）に「退室後」（遠藤 遥）、「浮島」（中丸 優佑）、「海外特別賞」に「Tweet」（Battulga Delgertsetseg）が選ばれました。

以上、受賞された皆様には素晴らしい作品をご発表いただき、改めて感謝いたします。受賞おめでとうございます。

残念ながら受賞されなかった作品についても、それぞれが可能性を秘め、今後の益々のご発展が期待できるものばかりでした。「アート&テクノロジー東北2024」にご応募いただき、誠にありがとうございました。

2024 年 7 月 20 日

岩手大学 人文社会科学部

教授 本村 健太